

# 記録を読む，声を聴く ——菅江真澄日記を題材にして——

菊池勇夫

## はじめに

歴史学という学問はどのような営みなのであろうか。現在科学とは違って、人間社会（自然・環境を含めて）の過去を対象とする学問である。文字史料をおもに扱う文献史学の場合、オーラルヒストリーが可能な同時代史（現代史）は別としても、死者たちのみとなった時代にあっては、その時代の人々が書き残した文書・記録と向き合い、そこから当時の人々の声を聴き取り、それを今によみがえらせ、さらに未来につなげていくメッセンジャーとしての役割ということになるだろうか。それを必要とするのは、より本質的には、人間は時間的存在である以上、どこから来てどこへ行くのか、歴史から逃れられない宿命を感じているからに違いない。過去を知り今を知る、そうした営みを歴史学は担っている。

さて、大学の教養教育といえど、高校日本史のような通史・概説をテキストにして教えているかと思われているかもしれない。おそらくそうした例は少ないだろう。おのおのの専門分野（時代・地域・テーマ）に即して、おのおのが重要と考える事柄を取り上げて、これから社会に出ていく若い人たちに歴史を知ることの大切さを伝えようと、標準に頼らない工夫、オリジナリティを心掛けているのだといえる。

そのさい、歴史をどのようにみるか、とらえるかという歴史観の問題が大きく横たわっている。ある特定の見方しか許容しない強制力が働き、そのため奉仕というのでは学問・教育は死んでしまう。より自由に能動的であることが求められ、個々の研究者・教育者によって歴史のとらえかたが異なっていてかまわない。しかし、最低限の約束事として、事実に基づくことと、論理的なつじつまによって担保されなくてはならない。事実を認定していく過程での見誤りや解釈の違いはありうるが、意図的にあることをなかつたことにしたり、なかつたことをあることにしたりしたら、それは歴史学の作法をはずれている。現今、「フェイク」(嘘やまやかし)が政治の場やそのほかで飛び交い、真実が見えにくくなっている。歴史のねつ造・歪曲に対して批判力、見抜く力をつけることも教養教育としての歴史(学)の重要な役割であろう。

それぞれの歴史観の違い、それは何に目を向けていくかの関心の差異としてあらわれる。ならば私自身がどうなのかがおのずと問われることになる。先学を引き合いにしていえば、近世史家の塚本学は「大きな歴史」と「小さな歴史」、あるいは「大状況」と「小状況」という言葉で、歴史への眼差しについてたとえてみせた(『大きな歴史と小さな歴史』吉川弘文館、1993年)。「大きな歴史」というのは、その時代のすがた、国・世界の動きを全体として生き生きと描いてみせるということであろうか。歴史家としてそのような構想力を持つことが期待され、歴史叙述の目指すところではある。しかし、「大きな歴史」が往々にして人々の、民衆・庶民などといってもよいが、その日常・非日常の織りなす生活世界、すなわち「小さな歴史」に無頓着にすぎたという不満足を感じてきた。戦争という最大のパワーポリティックスの局面において一人ひとりの命が最も軽視されてしまうのが、その例であろうか。

「大きな歴史」と「小さな歴史」とは切り離しがたくむすびつき、「大きな

歴史」の基礎には一人ひとりの生身の人間がいる。その喜怒哀楽・生死から歴史をみていく。国家や大事件を論じて、そのような立場を貫けたらと考えてきた。人間は社会関係のなかで生きているから、国民、民族、領民、村民、同族、家、家族の一員、また身分、階級、性差、宗教、識字、などさまざまな属性を帯びた存在である。一人ひとり、すべて状況が異なっている。民衆・人民・国民などといった言葉は簡便だが、一括りにして実存を伴わない生活感のない使用だけは避けたい。

さて本題に入っていかななくてはならないが、人々の生活世界について数多くの素材を提供してくれるのが、菅江真澄の日記などの著作である。これまでも幾多の恩恵を受けてきた記述の宝庫である。そのなかから具体的事例をいくつか紹介し、江戸時代人の声を聴いていくこととしよう。そこから教養教育としての歴史（学）について考えてみたい。

## 1 見しこと聞きしこと—菅江真澄の日記—

江戸時代の後期、東北地方・北海道南部の北日本を旅して歩き、その見聞を「日記」（「冊子」）に歌や絵（「図」）とともに書き残してくれたのが菅江真澄（白井英雄）である。天明3年（1783）、郷里の三河を旅立って以来、郷里を思いつつ、おそらく一度も郷里に帰ることなく、終の住処とした秋田領で文政12年（1829）に亡くなった。

晩年を迎えた文政5年（1822）12月、それまで書いてきた日記類を秋田藩の藩校明徳館に献納している。『笹ノ屋日記』翌6年2月6日条に50冊余の書目をあげるが、それらが『明徳館書籍目録』に「真澄遊覧記」と記載されたように「遊覧記」と呼ばれ、その名をタイトルとした現代語訳『菅江真澄遊覧記』（平凡社東洋文庫、その後平凡社ライブラリー）はたくさんの読者を獲得してきた。献納の事情については同日条に自らつぎのように記している。

おのれいとわかかりけるころより、見しと見し、聞しと聞し事を、筆のまに〜書あつめたるものゝさはなりしが、人のためにあきの木の葉とちりうせて、残りすくなくなり行を見て、ある書生フミツラハの、こを国の明德館に奉りたらむには、後の世に、ふみあみ、もの考なむたよりの一ツともなりなむと、せちに聞えつれど…（中略）…人々の仰にまけて、奉るものになむ（⑩435～436頁）。\*以下、引用にあたっては未来社刊『菅江真澄全集』を使用し、⑩435は第10巻435頁が出所であることを示す。

真澄は若いころから、すなわち北方の旅で、「見しと見し、聞しと聞し事を、筆のまにまに書あつめた」とあるように、その土地に暮らす人々の日々ある生活文化を観察・記録しておこうとする気持ちの大変強かった人である。紀行文・旅行記のよそおいであるが、民俗誌・生活誌的な雰囲気漂っている。むろん、「いにしへぶり」を知ろうと、万葉集や記紀などの古文獻、民間に伝わる縁起・物語など歴史への傾倒がみられ、「記録を読む」人でもあったが、基本は「声を聴く」記録（記述）者として「日記」を書き続けた。「記録」に「ニキ」とルビを振ったところがあり、「日記」はまさに「記録」であったのである。

ここでは、もろもろの事例を取り上げることができないので、真澄が土地の人々と交わした災害・飢饉について生の声をいくつか紹介するにとどめざるをえない。生の声といってもそのままではなく、多少は文飾・整序されているのだが、そこから人々の歎きや悲しみの感情が、時空を超えて現代の私たちにも直接届いてくる、そうした記述となっている。語り答える人、聴き問う真澄、そして時間を隔てて読み考える私たち（真澄を介して人々の声を聴く私たちと言い換えてもよい）という三者の関係を意識して、すでにこの世にいない過去の民衆的な人々の声に耳を傾けてみよう。

## 2 引き波と高浪一翁のおしえ

菅江真澄は日々旅するなかで地震に遭うことがときたまあった。また、土地の人から昔の被害地震について聞くこともあった。地震のことを「なへ(なゐ)」と記し、「なへふりて」「なへいたくふり」「地震大にふりたり」などと、「ない」(もともとは大地の意)に「ふる」(揺れる)を伴った表現を多くしていた。『日本書紀』などの古文献にみられる「ないふる」の用例にならったことであろうか。東北地方の方言にも「ない」「なえ」という言葉が使われているところがあった(『日本国語大辞典』第二版)。大きく震動すると、こわがりながら「まんざいらく(万歳楽, まんざいらく)」と唱える土地の人々の様子が書きとめられている(『小野のふるさと』①244頁, 『牧の冬かれ』②303頁)。

そうした地震記事のひとつであるが、真澄が松前藩の城下町福山で寛政4年(1792)5月9日、去る4月24日(新暦6月13日)に北海道西海岸の積丹半島近辺で地震が起き、それに伴って津波が発生し、被害地震となったことをその地から帰ってきた者たちが話すのを書きとめている。

この頃鯨のあびきにわたりたる海士人ら、蝦夷のをる島より帰る舟人など語るを聞ば、四月廿四日、西蝦夷のヲシヨロ、タカシマ、オカムキ、シヤコタン、ビクニ、フルビラなどいへる処になへふりて、潮ひて、なだも磯のごとくに石あらはれ、歩わたりして、そひ、あぶらこ、なにくれの魚、又かひつ物は、しゆり、あはび、のななどは、石砂のごとく、わらし〔童子をいふ〕まで拾ひをるに、時の間におほ汐起り高浪みたびより来て、<sup>アキノ</sup>蝦夷、<sup>シヤモ</sup>和人、いくばくの人波におぼれ、磯やかたは、みなひき波にとられて、からくして山にかけのぼり、岨にたつ木の枝をたつきにたぐり寄せてをり、高き巖の末には、したゞみのごとくすがりて命い

きたるものもありき。吾等かしこくも，むかし五十二年前なるつなみに，澳なるふねはことなかりしと，ふるき翁のつねにをしへたるをまもりて，こたび，なへし，磯の干たるを見て，こは津浪のより来ならん，いで真沖にこぎ出よ，たれも〜といへど耳にも聞入ざるものは，みなこの磯にふねよせてしづみたり。わがふねは，あせと汐とにぬれて遠おきにいかりかけて，此わざはひをのがりぬるは，あめのたすけにや。又，あがおやのをしへを，そむかざりけるこそあなれと，いきもつきあへず，なが〜とかくいひて去ぬ。（『ちしまのいそ』②259～260頁）

宇佐美達夫ほかの『日本被害地震総覧599-2012』（東京大学出版会，2013年）には，マグニチュード7.1程度で，「小樽から積丹岬辺で有感，津波あり，忍路で港頭の岩壁崩れ，海岸に引き揚げていた夷船漂流。出漁中の夷人5人溺死。美国でも溺死若干」（122頁）と簡潔に記載されている。その典拠となっているのは串原正峯『夷諺俗話』（寛政4年〈1792〉11月序）の「難船，破船，津波等の事」の箇所である（『日本庶民生活史料集成』第4巻501頁，三一書房，1969年）。串原は寛政元年（1789）のクナシリ・メナシのアイヌ蜂起鎮圧のあと，松平定信政権の幕府が実施したアイヌへの「御救交易」のための最上徳内一行に加わり，日吉丸という船に乗って松前からソウヤまで交易荷物を積み下った。いつどこで聞いたのかまで記していないが，とりわけヲシヨロ（忍路）では，澗の左右にある岸壁が地震で崩れ，その土煙りで浜辺の運上小屋やアイヌの家がみえなくなり，津波で浜辺へ引き揚げた「夷（蝦夷）船」が残らず流失し，漁事に出ていたアイヌ5人が津波で水死したという。

右の『地震総覧』に美国（ビクニ）溺死若干とあるのは，『夷諺俗話』の「蝦夷人，日本地の人とも大勢水死ありしよし」を受けてのことかと思われるが，アイヌと和人の双方に犠牲者が出たことになる。また，ヲシヨロ

のアイヌの人たちが津波の翌日より「メツカウチ」（メツカ打）というのを始め、これは船が遭難して水死するなど「変死」した場合、その者の家、親類、村所の人が大勢集って、「刀のむねにて額を打事なり。尤疵付血も出るなり。是は愁傷を忘れさずるとて打事」で、かの国のならわしだとしている。災害死を乗り越えようとするアイヌの人たちの作法であった。

さて、真澄が話を聞いた「海士人」というのは、「鯨のあびき（網引）」のために蝦夷地（とくに日本海側）に渡り、その漁事を終えて帰ってきた出漁の漁師たち、また「蝦夷（アイヌ）のをる島」から帰ってきた「舟人」はアイヌ交易品や場所産物を積んで行き来する廻船の船乗りを指しているのだろう。18世紀の末頃といえば、蝦夷地の各場所（商場）でのアイヌ交易はその交易産物（おもに肥料・食用となる海産物）を大坂など全国市場に運んで儲ける商人が松前藩に運上金を納めて請け負っていた。松前・江差地方（和人地）の鯨漁が天明期（1780年代）極端な不漁に陥り、その地の漁民たちが鯨を追って西蝦夷地にさかんに入り込むようになった時期にあたる。津波が直撃したヲシヨロ（忍路、小樽市）、タカシマ（高島、小樽市）、オカムキ（積丹町）、シヤコタン（積丹、積丹町）、ビクニ（美国、同上）、フルビラ（古平、古平町）といった積丹半島から小樽にかけての場所は当時、そのような最前線の鯨場であった。『夷諺俗話』のヲシヨロでのアイヌ5人の犠牲も漁事とあるので鯨漁に従事していたのであろう。

真澄の記事で注目されるのは、津波の寄せ方が具体的に書かれていることである。「なへふり」のあと、潮が引く現象がみられた。灘も磯のように石が現れて、歩き渡ることができ、そひ、あぶらこ、といった魚や、しゆり、あはび、のな、などといった貝を石砂のように子どもまでが浜に出て拾った。少し間をおいて大汐が起こり、高浪が三度押し寄せてきた。蝦夷、<sup>アホノ</sup>和人<sup>シヤキ</sup>が多数波におぼれて、磯辺にある家はみなその引波に取られてしまった。山にかけのぼり、あるいは岨（がけ）の木の枝をたぐりよせて高い巖の末にす

がりつき、命が助かった者もいた。津波襲来の現場がリアルに想像される。

そして、かつて津波を体験した「ふるき翁」が常に語っていた「おしへ」を守り、自分らの船は災いから逃れられたのだという。「むかし」の52年前の津波のとき、<sup>おき</sup>澳にいる船は無事であった。今回、「なへ」がして磯が干るのをみて、これは津浪が寄りくる前兆なので、さあ、「真沖」に漕ぎ出そうとみんなへ促しても、耳にも聞き入れない者はこの磯に船を寄せて沈ませてしまった。『夷諺俗話』にヲシヨロで浜辺へ引き揚げた「夷船」は残らず流失したと記していたが、各磯浜で同様の引き波による流失がみられたのであろう。どこの浜かは不明だが、自分の船は遠い沖に碇をかけて災難を逃れることができ、天の助け、あるいは親の教えに背かなかったためであったかと、「いきもつきあへず、ながなが」と語って去っていった（『ちしまのいそ』②259頁）。

52年前の津波というのは、寛保元年（1741）7月19日（新暦8月29日）の松前（福山）・江差など渡島半島南部の西海岸を襲った津波を指している。真澄が老婆からその父親が亡くなった津波体験を詳しく聞くことがあった。江戸時代の北海道では死者1500人近く、または2000人ほどもいう最大の、東北地方を含む北日本でも慶長16年（1611）の慶長津波に次ぐ被害津波であった（拙稿「寛保の松前大津波―被害と記憶―」『近世北日本の生活世界―北に向かう人々―』清文堂出版、2016年。初出『季刊東北学』28、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2011年）。ここでは説明を省くが、寛保の津波でも確かに津波の前の引波現象が起きていた。

真澄に引く波と沖への漕ぎ出しを語った「海土人」もしくは「舟人」は自らの体験ではなく、親の世代のできごとであったが、50年という時間をまたいで教訓として受け継がれていた。文字によらない「むかし」の伝承力はどこまで続くのであろうか。真澄が記録＝文字化したおかげで、そうした時間の制約を超えて私たちが知ることができる。ただ、「むかし」の教訓とい



っても、それを聞き入れず同じ被害を繰り返すことの多かったことも真澄の記述は私たちに教えているのであった。

ひとつ注意を要するのは、真澄のこの記事から、津波が寄せて来る前には必ず引き波があるもの、と受けとめてはいけないことである。先に引き波が来ることもあれば、押し波が先にくることもあるからである。真澄に語った人は引き波があったときの経験知を語っているのであって、引き波が先に来るとは何もいっていない。その点を誤解してはいけない。

### 3 卯辰のやわしき世—飢饉のリアル—

これまでも菅江真澄の『楚堵賀浜風』が記す天明3・4年(1783・84)の津軽地方(弘前藩)の飢饉の惨状を何度となく取り上げてきた(『飢饉から読む近世社会』第一章「旅人のみた天明の飢饉」校倉書房、2003年。初出『歴史の道・再発見』1、フォーラムA、1994年)。真澄が津軽に足を踏み入れたのは天明5年8月の、飢饉がほぼおさまってから一年後のことであったが、草むらには白骨が乱れ散りあるいは積み重ねてあり、ありとある家が倒れて骨組みや柱のみが立ち、火事でみな焼けて仮小家のみがたちならぶ、たとえばそうした飢饉の爪痕を残す荒涼とした風景が目の前にあった。

それだけでなく、涙流し、泣きつつ語る民の声が拾われているのが、この日記の真面目といえようか。この天明5年という年も凶作勝ちにみえて、一昨年の大凶作が思い起こされ、またも飢えてしまうのではないかとの動揺が走っていた。まだ凶作と定まったわけではないのに、はやくも地逃げといって居村から立ち去る「うへ(飢)人」の家族にも真澄は出会い、先の飢饉では松前に渡ったなどと話すのを聞いていた。ここには8月19日、真澄が青森・浅虫方面から引き返して、一夜寝たことのある浪岡の宿に泊まり、右の「うへ人」のことを宿の主人に語ったさいの、その主人の受け答えをあげておこう。

さやうさふらふ、この年も、くれ行まではむつかしき世中のすぎはひならんや。去年をとゝしまで、此邑は馬をくらひて命をのびぬ。家の数は八十あまり侍れど、馬のしゝをたうび侍らぬものは、あがやを入れて七八家も侍らん。太雪などのうへに死たる馬を捨おけば、髪はおどろをいたぶきたる女あまた集りて、手ごとに菜かたな、いをかたなとりもちて、われ、よきところしゝきらんと、あらがひ、さきとり、血のながるゝかひなに肉をかゝへてかへり行ありさま、又人の路なかにたふれふし、あはるは、死たるむくろを犬のかしらさし入てくひありくが、血にそみたる面して、ほえめぐるおそろしき、いはんかたなかりしが、はた此としも、過たるとしにまさり侍らば、こたびは、かてのうま、うしもあらじかすと、いまよりわらび、葛のねもほりつきて侍れば、あざみの葉、をみなへしをつみ、これをむして、かてにはみぬと、ないつゝかたる  
(『楚堵賀浜風』①288頁)。

この村では馬を食べて生き延びることができたという。80軒余のうち馬の肉を食べなかったのは自分の家を含めて七、八軒にすぎなかった。冬、大雪のうえに死馬を捨てておくと、おどろ髪の女たちが菜包丁、魚包丁を持って集まり、その肉のよいところを争って切り取り、血の流れる腕に抱えて帰っていく有様であった。馬は農耕・運搬用として大切に飼育され、馬肉の食習慣はなく、食べること自体忌まわしいとされる行為であったが、飢饉がひどくなるとそうはいかなかった。他の箇所には生き馬の殺し方までが真澄によって聞き取られていた。だからこの主人のように馬を食べなかったことが罪・穢れを犯さなかったとして語るに値したのであった。

また、路中に倒れ伏した人の死骸を喰い歩き、血で染まった面で吠えめぐる犬への恐怖が語られている。人と犬の関係も良好ばかりではなかった。「かて(糧)」となった馬や牛は食べてすでになく、もし今年、その凶作を上

回ることになれば、蕨や葛の根も掘りつくしてしまったので、あざみの葉、おみなえしを摘んで、これを蒸して「かて」にし食べるしかない。このように主人は泣いて語り、真澄もいろいろの草をまな板の上に乗せてうち叩く音は砧の音にまざっているように聞こえ、袖をぬらして夜を明かした。状況を冷静に事実として書きとめながら、寄り添い、感情移入する真澄がそこにいた。この日記に記された飢饉の痛ましさはさらに尽きないのであるが、ここでとどめておく。

真澄は仙台領で3年ほど滞在し、それから再び松前をめざした天明8年(1788)の旅で津軽半島の陸奥湾沿いを歩き、さらに松前・下北の旅を終えてから寛政7年(1795)より享和元年(1801)まで津軽領内の各地を巡った。その津軽の旅にも天明の飢饉のことが出てくる。天明8年(1788)7月9日、陸奥湾沿いを北上していくと「郷沢といふ村のあと」(現蓬田村)があり、「卯辰のうゑに、いさりする魚だにあらで、犬をつくり馬を屠りてくらひたりしころ、人身まかりやけたりしと」聞いている(『率土か浜つたひ』①462頁)。天明の飢饉が「卯辰」の飢えと干支で記憶され、漁獵も凶作だったこと、犬・馬を殺して食べたこと、そして人が死に家も焼け、村の跡のみが残る、死に絶えの村であった。

寛政8年(1796)4月14日、青森の三内の千本桜を訪ねたとき、案内してくれた村長が、「卯辰」の「世の中凶しかりとし」に「その世のためにたき木にこり」て、今は花の木も残り少なくなったが、若木も彦生も多いので10年も経てば昔のように春が栄えるだろうと話してくれた(『栖霞能山』③93頁)。飢饉からの復活の気持ちが桜花にこめられている。同年5月7日、行岡(浪岡)八幡宮に詣でたさい、8月15日の神事で、斎夜に男たちが太刀を交換しあう「ふりかへ」が「卯辰のやはしき世」から絶えていたが、それがこの頃再興されたとのことであった(『栖霞能山』③108頁)。伝統行事の復活が地域の復興のしるしであった。

同年6月24日，小泊の宿を立つと，海静山正行寺という法華経をよむ寺（日蓮宗）で，「世中やはしかりしとし飢死たるもの」らの「なきたまとぶらふ法」の行いをするというので，海のわに（鮫）・鯨も驚くような音を出して銅鑼を打ち鳴らし，それを浦人が聞いて皆が詣でていた。「十とせあまり三とせのころほひ」とあり，十三回忌の法要が執行された。有縁・無縁の年忌供養を通じて飢饉が記憶されていくのであった（『外浜奇勝』③141頁）。同年7月16日，秋田領に近い西海岸の岩崎では「泉郎」（漁師）の「ならばし」を聞いている。ここでは手槌藻（まつも）を春の海に刈って干し，米・粟・麦にまじえて「つねの糧」としてきたので，「いにし卯辰のやわしかりつる世」でも「うれへなけん」と語っていた（『外浜奇勝』③153頁）。同じ津軽領でもこのような海村もあった。同年10月28日，白沢という山村を通ったとき聞くには，この村は「卯辰の飢渴」の頃に滅んで，今は家4，5軒あるのみであった（『雪の母呂太奇』③200頁）。

真澄の日記のうちでも，とりわけ寛政8年の記事中に「卯辰」の飢饉のことが出てくるのは，この年が十三回忌にあたっていたことが関係しているかもしれない。生き残れなかった死者の霊の供養を通して飢饉の惨状が思い出され，荒廃・断絶からの復興・復活が確かにみられ，飢饉を乗り切った人々の体験の記憶がまだ鮮明にあることを真澄の日記からうかがうことができる。晩年，菅江真澄は「卯辰の飢渴」について随筆『布伝能麻迹万珥（筆のまにまに）』に書いているが，自身にとっても忘れがたい津軽の飢饉見聞であった（⑩66頁）。

#### 4 ししがおろける—獣害対策—

真澄の日記には地震・津波や飢饉だけでなく，風水害，難船，獣害，虫害，火災，疫病など，さまざまな災害が記述されている。獣害に関心を向けてみると，真澄が歩いた頃，松前では熊が荒れて山中通行の人馬の脅威とな

っていた。また、南部や秋田などでは鹿の食害が農民を嘆かせていた。もう少し前の東北地方ならば、馬を襲う狼、あるいは病に罹った狂犬、そして作物を食い荒らす猪の被害が目立っていたのであるが、それがほとんど見聞されていないのは、狼や猪の駆除が進み、獣害の主役が交替したことの反映であるのだろう。獣害も人間の関わりが大きく働き、時代性や地域性があるが、ここでは鹿の被害に悩む声を聴くことにしよう。

盛岡（南部）領下北地方に滞留中の寛政5年（1793）4月27日、牛滝から脇野沢に抜ける山道を歩いたときのことである。源藤城あたりは、「山子とて杣山賤をわざにて、そぎたのみつくり、めは山畑にたがやし、あるは布をりぬ」と記されたように、男は杣稼ぎ・箕作り、女は山畑作りを生業としていた。その先の滝山では次のように書いている。

山ふぶきのくきをさきて、よねぬかをふりかけ日にほし、かきねにかけたるを、あめやふりこんと、とりをさむる女翁のいはく、此山里は、しゝ、ましがをろけて、あはほ、ひえほ、まめ、そばなど、みなこきくらはば、とることのかたく、かゝる草をもかてにつぎて、世のすぎはひとすれど、折としてはかてつき、うへ待るとてなげくに、なみだおちぬ。…脇野沢につきて、里のをさがもとにやどる。（『於久能宇良〜』② 325頁）

やまふぶき  
山落（つわぶきの古名）の茎は食用となる。その茎を割き、それに米糠をふりかけ、垣根にかけて日に干していたが、雨が降ってくるかもしれないと、それを家のなか取り入れている女翁がいた。その物は何なのか尋ねたのであろう、山落の処理法が聞き出されている。そして女翁が、このあたりでは「しし」「まし」が「おろけて」、粟、稗、豆、蕎麦を喰われてしまい、収穫するのが難しく、このような草まで「かて」として食べている、ときに

「かて」も尽きてしまい飢えてしまうのだと嘆いていた。

「しし」は鹿・猪・カモシカ・熊といった野の獣を指している。真澄が下北の異国間で、田面の稗を刈って（寒冷のため稲作ができず水田に稗を植えている）、「まとり」と呼ぶ「またぶり」（又木）で打ち叩き、実を落としていた女たちが、「かのしし」（鹿）が夜々喰うので「からのみ」取ると、同じく獣害を嘆くのを聞いているので（同年9月8日、『まきのあさつゆ』②373頁）、女翁のいう「しし」とは鹿が念頭にあるのだろう。また、「しし」が荒れることを「うるける」「をろける」というのだと、松前で日記『ひろめかり』（②八六頁）に注記しているので、下北・松前で使われている土地の言葉であろうか。粟・稗などの栽培は、その前の文章に「山畑」と記されているので、おそらく焼畑なのであろう。異国間の田稗の収穫にみられるように農業労働は主として女、いっぽう男は山稼ぎ（桧山の伐採、ここには記されないが松前稼ぎもあった）と分業のみられたことが推測できる。さらに山路など山野の「かて草」の採取も女たちの仕事だったに違いない。わずかに数行の記載にすぎないが、そのような暮らしの様相が浮かんでくる。真澄はここでも涙していた。

鹿の食害は秋田領の男鹿でも深刻であった。文化7年（1810）4月7日、<sup>ほんざん</sup>本山の高嶺から下ってきたところで、山のとかげ（常陰）から、たかうな（筍）を食べていたのであろうか、鹿が笹原を「かいならして」（掻き回しての意か）群れて去っていった。案内の人が「うれへ語る」に、この山には「ことけもの」はいないものの、「鹿のみいと多くすみて、田畑のものはみつぐす」ので、秋は田ごとに「縄網」を張る、しかし、女鹿は網の目をうちくぐって稲をはむ（『雄鹿の春風』④209頁）、というのであった。田ごとに縄網を張って鹿の侵入をふせぐ防禦対策が語られている。

同5月上弦（7、8日頃）、湯の尻の浦に一夜泊ったときも、湯の山のこちら側に鹿がたいそう多くて、田ごとに「やきしめ」（焼標）を刺して、暮れ

には貝を吹いて追い払うのに暇がない、と語るのを聞いている（同前④219頁）。男鹿の「やきしめ」がどんなものかまでは書いていないが、仙台領滞在中の天明6年（1786）4月7日、東磐井郡大原から浪民への田の畦路をたどると、「鹿おどし」といって、「馬の毛を、しのゝ長串にさしてやきくろめ、又、わらを束ね切りやいて是も串につらぬきて、田のあぜごとにさし」であるのを目撃し、これこそ、古歌「あすよりはやきしめ小山田のわかわさ（わさ=早稲）のねを鹿もこそはめ」に詠まれる「焼標（ヤイシメ）」かと納得がいったようであった（①368頁）。馬の毛や藁束を焼け焦がした匂いで寄せ付けない獣害除けの方法であった。柳田國男・倉田一郎編『分類山村語彙』（国書刊行会、1975年、242頁）によれば、「髪を毛を串に挿み火に焦し、山畑の傍に立方法で、獣をいやがらせ去らしめる装置」で、「獣の皮の小片を切って焦がし用ゐた」ところもあった。男鹿もこれに類したやりかたであったろうが、獣害対策に手間暇かけ、苦勞してきたことが、語る声を通して臨場的に伝わってくる。

男鹿の鹿は、柳田國男『雪国の春』に収められた「おがさべり—男鹿風景談—」（初出1927年）に「鹿盛衰記」として触れられている。『男鹿名勝誌』が引かれるが（『柳田國男全集』2、173頁、筑摩文庫版）、『男鹿名勝誌』というのは狩野徳蔵『秋田男鹿名勝誌』上下（秋田活版社、1884年）のことで、その狩野の鹿の記事もたどると嘉永頃に男鹿船越の人鈴木重孝の『絹篩』（『秋田叢書』第2巻）が典拠である。くわしくはそれに譲るが、秋田氏の時代に鹿を狩り絶やし、佐竹氏になって放したのが増えて、宝永3年（1706）以来鹿狩が行われ、とりわけ安永元年（1772）には2万7100余頭討ち取った。その後も獵人が打ち絶やし、文化12年（1815）に獵師に男鹿の山中の鹿数を調べさせたところ、わずか4、5疋しか見当たらず、鹿打ちは差し止めになった（288頁）。真澄が鹿害の憂いを聞いたのはその数年前のことである、真澄が聞いた獣害対策とは別な方法、まさに鉄砲の威力によっ

て鹿が激減しつつあったのが真澄も気づいていない現実であった。獣の盛衰には人為性が深く関わっていたのである。

## おわりに

菅江真澄には限りない事物への探究心があり，その書いたものを人に読んでもらいたい気持ちのある人であった。「探究の人」と評したことがある。前述のように，その日記が「後の世に，ふみあみ，もの考なむたよりの一ツ」となるという，周囲の人々の勧めによって献納したものであった。献納されていなければ多くは散逸して失われ，今読むことはできなかったかもしれない。史料は残す意思が働かなければ残りにくい性質のものである。

真澄が亡くなってから200年近くも経った「後の世」に私たちはいる。真澄の日記でなくてもかまわないが，史料を読むということは当時の人々の声を聴き，それに思いをいたし，何がしかを感じ取るということである。ここでは津波，飢饉，獣害という災害を取り上げた。それは現代の私たちが抱えている不安，リスクでもある。東日本大震災で津波被害，そして原発事故の恐怖を知った。被災者の願い通りに復興や対策が進んでいるのか，その受け止め方の幅は相当に大きい。飽食のようにみえるが貧富の格差が広がり，国境を越えて食料が動き，地球温暖化による作物被害が現実化し，飢餓の構造が見え隠れする。過疎が進み，里山が利用されなくなるにしたがい，野の獣の逆襲が始まったようにみえる。

このような現代に生きている私たちにとって，200年も前のことを学んで何の役に立つのか，という声が聴こえてきそうである。科学技術，社会インフラ，生活様式が江戸時代とまるで異なっている現代社会に，右の真澄の記述がそのままあてはまるわけではない。忘れかけた，あるいは失われた知恵や技術が見直され，復活することがあるにしても，すぐに役立たないならば，過去・歴史について学ぶ必要がない，あげくに教養教育や文学部のよう



なものは無駄という議論にもなってしまう。

しかし，そうなのか。100年前でも，500年，1000年前でもかまわないが，その時代の人々がどのような暮らしをし，身の上に降りかかった困難をいかに乗り越え，あるいは乗り越えられなかったのか，そこに想像力をめぐらして考えることが，今の私たちが直面する困難に処方箋を与えてくれるのではなくても，自分たちの生活世界を捉えなおすことにつながり，よりよき未来をつくっていく潜在的な力になるのではないか。そのようなむしろ漠な期待をもって，教養教育としての歴史の意義を捉えたい。